

ケンブリッジ大学図書館蔵

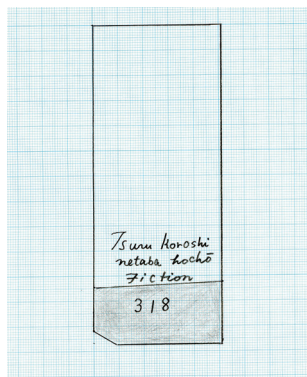
「アストン和書目録」について (11)

虎 尾 達 哉

7. 「和書目録」とラベルの機能についての中間報告

筆者は別稿「アストン旧蔵和書とアーネスト・サトウ」（『地域政策科学研究』4、2007年）において、アーネスト・サトウより蔵書の貸与を受けた1892年以後の、アストン旧宅における和書の所蔵形態について、以下のように推定した。

アストン旧宅には和書排架用としてcase I、case II、case IIIの3つの書架があり、一つの書架には各々6つの棚（shelf）があった。A類1081点の蔵書の多くはこれら3つの書架に排架された。すなわち、case Iは、4つの棚にA類の中で大方アストン自身が日本より持ち帰った蔵書が収められ、残り2つの棚の1つにはサトウから貸与された和書（サトウ蔵書）、もう1つには洋書が収められた。一方、case II、case IIIはサトウ蔵書によって埋め尽くされ、さらにcase3の近くには排架しきれなかった109点900冊余りの和書が堆く積み置かれている状況であったと思われる。



図版1 ラベル1

以上のA類に対して、B類897点約4200冊の蔵書（そのほとんどはサトウ蔵書）は排架せずに積み置くべき書物とされたと思しく、「ドアの上の収納庫」（shelf over door）と「納戸」（box room）の2か所に収納されたのであった。

さて、これらの和書を1点1点目録化した「和書目録」（以下、目録）はアストンの生前、つまりCUL（Cambridge University Library）で2冊の洋装本に仕立

てられる以前にどのような形態で保管されたかは不明である。しかし、この目録が実際の蔵書に対してどのように使用されたかについてはある程度の推測が可能である。

その手掛かりとなるのはCULでの実地調査で筆者が偶然発見した図版1のような紙片である。この紙片は1冊本の「鶴殺疾刃庖刀」(つるころしねたばのほうちょう)の中に挟み込まれていた。タテ12.7センチ、ヨコ5.1センチの長方形で、その下方部には筆記体で「Tsuru Koroshi/ netaba hocho/ Fiction/ 318」と4行にわたってペン書きされている。その字体はたとえば「Fiction」の特徴的な書き方からして、まずアストンの自筆と断定してよい。

さて、「鶴殺疾刃庖刀」は目録ではA類に属し、318の番号が附せられている。つまり、上記の「318」とは目録の番号に外ならないのである。当該個所の原文を引いてみよう。

A Tsuru Koroshi Netaba no hocho, by Yencho. Tokio

318 1887. 5×71/2 boards, European style. Illustration

(vile).

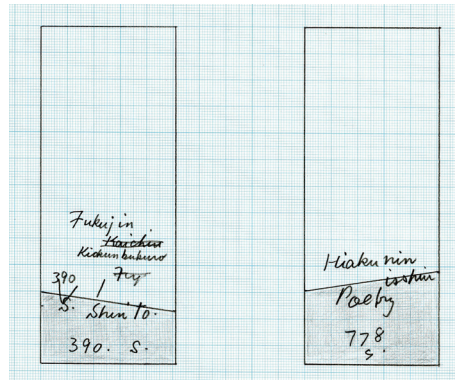
A novel stuffed with crimes and horrors
of all kinds.

Fiction

こうしてみると、紙片の書き付けは目録中の書名、分類、番号(以上、網掛け)を摘記した内容となっているのがわかる。

そして、この紙片全体を観察して特に注目されるのは、その下端が左は端から2.3センチ、右は同じく2.5センチの両点を直線で結ぶ台形部分が日焼けし、他の部分と明確な濃淡差が出来ていることである。しかも、上記の「318」という番号はその日焼けした台形部分の中に収まっている。

以上のことからこの紙片について想定されることは、ただ一つしかない。



図版2 ラベル2

ラベル3

それは、この紙片が目録上「A318」とされた書物の中に、その「318」の番号が外から見えるように挟み込まれた一種のラベルの役割を果たすものだったらしいことである。

実は幸いなことに、この時の実地調査では、これ以外にも同様の紙片がさらに2枚確認されたのであった（図版2）。分量はともに上掲と同じである。

左は5冊本（1冊に合装）の「福神教訓袋」より出現し「Fukujin/Kiokunbukuro/Shinto/390 S」（抹消部分省略）とペン書きされ、右は1冊本の「百人一首」より出現し「Hiakunin/issui/Poetry/778/S」とペン書きされている。前者は目録にA390として、後者は同じくA778として採録された書物である。これらについても原文を引いておこう。

A Fukujin Kyokun bukuro. by Suzuki Mochiyoshi.

390 Osaka.1732 5 vols. in one. 6 1/2×9. in loose cloth cover. Illustrations fairly good.

S

Shinto

- A **Hiakunin isshiu**. Edited by Risako aged 70
 daughter of Moriyama Gengoro. 1836. 9×12 1/2
 Edition de luxe. Brocade binding outer cover. Extra thick paper
- 778** Handsome, fantastic calligraphy.
 The well known collection of tanka in the hands
 of every school girl. trans. Dickins and others.

Poetry

2枚の紙片の書き付けがいずれも最初の紙片と同様に、目録中の書名、分類、番号を摘記し、さらには「S」字をも摘記した内容を呈していることがわかる。なお、この目録の全篇を通して頻出する「S」字は、アーネスト・サトウから貸与された書物であることを示す符号である（上記別稿の論証による）。また、2枚とも、やはり下端に台形状の日焼けがあり、番号が各々の日焼け部分に収まっていることも最初の紙片と共通するが、この2枚については「S」字もそこに収まっていることが興味深い（後述）。

要するに、この実地調査で偶見した同規格の3枚の紙片は書名・分類・目録上の番号・「S」字といった目録記載事項中の必要最低限の情報を摘記し、現物の平積みされた書物に、番号と「S」字だけは外から見えるように挟み込まれたラベルであった。以下、この紙片を便宜ラベルと称する。

ところで、叙上ではこのラベルが目録記載事項を摘記した、と言ったが、ラベルが先に記され、そのあとに目録がより詳細に記載された可能性はないかとの疑問もあろう。

しかし、その可能性はない。「福神教訓袋」のラベルがそのことを示唆している。このラベルでは2種類の書き間違いと抹消が見られる。

1つは、当初、書名として「Fukujin」の下に「Kiokunbukuro」と書くべきところ、誤って「Kaichiu」と書き、さらに分類として「Shinto」と書くべきところを「Fiction」と書きかけた。恐らくそう書きかけて間違いに気づき、両者を抹消し、その下に正しく書き直したのである。「Kaichiu」とは

「Kara no Kaichiu」（虚空解紐）の後半部分であるが、実はこの書物は目録ではA389、つまり「福神教訓袋」の1つ前の書物であり、分類は正しく「Fiction」である。これは現物の和書を目の前にして書いたならば、およそ起こりようのない間違いである。英文表記された目録から摘記する作業の中であって始めて、いわゆる目移りから生ずる間違いである。

もう1つの間違いも同じ理由によって説明できる。アストンはこの書物の番号と「S」字を本来は「百人一首」のように下端の、書物に挟み込んでも外から見える下端に記す方針で臨んでいた。にもかかわらず、誤って下端上方の左に「390」と「S」字を上下に書いてしまう。そこで、これを抹消し、下端に書き直したのである。これは目録を見ながら書いたからである。上掲の原文にあるように、目録の書式では、番号と「S」字が用箋の左端上方に上下に配される。アストンは自らの方針を忘れ、ついこの書式に倣ってしまったのである。

それでは、アストンはこのラベルを目録作成と同時に書いていったのであろうか。それがもっとも合理的に思われるのであるが、恐らくそうではあるまい。確証はないが、目録の作成とラベルの作成との間には少しく時間差があるように思われる。というのも、A318とA390においては、ともにその書名表記に関して、目録とラベルとの間に、若干の違いが存するからである。

すなわち、A318においては、目録では「Tsuru Koroshi Netaba no hocho」となっているのに対し、ラベルでは「Tsuru Koroshi Netaba hocho」と「no」が落ちており、またA390においては、目録では「Fukujin Kyokun bukuro」となっているのに対し、ラベルでは「Fukujin Kiokun bukuro」と用字が異なっている。もし、ラベルを書いたのが目録を書いた直後であり、しかもその目録を見ながら書いたとすれば、かような違いはまず生じにくい。アストンは恐らく目録完成後しばらくしてから、これに拠りつつも、その内容を摘記する形でラベルを作成したものと憶測する。

いささか微細に及んだが、上掲3枚のラベルから、今一つ注意すべき点を指摘しておきたい。それは、これらのラベルには番号は書かれているものの、

目録のように「A」字を記すことはしていない点である。これは何を意味するであろうか。

容易に考えられるのは、アストンはラベルについて、A類に限って作成し、B類は作成しようとしなかったことである。たしかに、今のところB類に属する和書からは上掲3枚のようなラベルは見つかっていない。

ただ、CULのアストン・コレクションは貴重書として、当然のことながら閲覧に制限があり、悉皆調査は実際上困難であるから、B類に属するアストン旧蔵書（そのほとんどはサトウ蔵書）の中にも何らかの形のラベルが存在する可能性は否定できない。そもそも、そのようなラベルがないとすれば、目録においてB類に附せられている番号はほとんど無意味なものとなるであろう。したがって、本来はB類についてもラベルが作成されてしかるべきであるように思われる。

しかし、それにもかかわらず、アストンは当初からB類のラベルを作成するつもりはなかったのではないか。それは先述したアストン旧宅における蔵書の所蔵形態と関連する。すなわち、そこではA類の多くは書架に排架され、一部は書架の近くに積み置かれた。一方B類は書架ではなく、収納庫や納戸の2か所に収められた。このような所蔵形態からすれば、B類の書物については、挟み込んで外から番号や「S」字を視認するようなラベルは作成してもほとんど役に立たない。上掲のラベルは和書を平積みにして、積まれた書物全体の天または地に障害物や遮蔽物のない開放的な場所、たとえば書架や床上・机上では機能するが、収納庫や納戸のような閉所では機能しないのである。

それでは、何故アストンはA類の和書に限ってラベルを作成したのか。ここで想起されるのは、A類の目録が書架 (case) と書棚 (shelf) を明記して作成され、さらに書棚ごとに、そこに排架された書物の番号が冒頭に記載されている (例「1-95」) 点である。つまり、目録を見れば、どの書棚に何番から何番までの和書が排架されているか一目瞭然なのであるが、それだけだと目録中のある和書が書棚に排架されたどの書物なのかはわかりにくい。加えて、和書の外題や封題は漢字・和文で書かれているのであるから、目録の英文表

記の書名から現物を探し出すのは、所蔵者であり日本語にも精通したアストンならいざ知らず、他人には至難である。上掲のラベルは、アストン以外の日本語を解さぬ者であっても、目録から現物の和書を容易に探し出せるように、作成されたものであろう。そして、それは恐らく、アストン所蔵の和書が自分の死後自宅から別の場所に移管されることを予め見込んだものであった。もっと言えば、その移管に際してアストンならぬ他人が目録と書棚に排架された現物とを照合し、さらに実際の搬送時に系統的に梱包できることを期したものであったと憶測する。

ただ、それはB類については断念したと思しい。A類のように書棚に整然と排架されることなく、収納庫と納戸の2か所に恐らくは雑然と、しかもぎっしりと詰め込まれていたB類897点約4200冊について、アストンは相当の手間隙をかけて目録化だけは成し遂げた。しかし、B類の目録には冒頭のB1に収納先として「ドアの上の収納庫」(shelf over door)と「納戸」(box room)と追筆風に記すのみで、その「収納庫」「納戸」に収納された和書がそれぞれ何番から何番までかといった記載がない。それは物理的に不可能もしくは困難だったのであろう。そのようなB類の目録に対して、A類のようなラベルを作成することは全く無意味とはいえないまでも、A類ほどの有用性はない。アストンがB類についてラベルを作成しなかったとすれば、その理由は以上のようなものであったろう。

もっとも、別稿で明らかにしたように、B類の和書はその99%がサトウ蔵書であったから、これらの書物の照合・梱包に際しては、アストン同様日本語に精通していた盟友サトウに託す気持ちが働いたかもしれない。

一方、A類も大半はサトウ蔵書であるが、case Iに限って見れば、サトウ蔵書は23%にすぎず、逆にアストン個人の蔵書は77%と8割近くにも達する。そして、アストン個人の蔵書のほとんどはこのA類に属するのである。アストンがA類については死後の寄贈先の便宜まで考えて目録を記載し、さらにラベル作成にも及んでいることには、あるいはこのような事情もあったのではないか。

とはいえ、無論、アストンにサトウ蔵書を軽んじる意識など全くなかった。再三繰り返すが、そもそもA類の大半はサトウ蔵書であった。そして、何よりもアストンはA類のラベル作成に際して、書物に挟み込んでも外から見えるその下端に、目録の番号とともに、サトウ蔵書については「S」字を書き入れて、該書がサトウ蔵書であることを文字通り明示したのである。ラベルの露出部分にわざわざ「S」字をも書き入れた意味についてはさらに深く考える必要もあるが、少なくともアストンのサトウへの敬意と学者としての潔癖を示すものであることは疑いない。

以上、偶々発見したA類のラベルについて考えるところを述べてきた。本節ではB類のラベルは作成されなかったという前提に立って考察を進めたが、上述のように、今後の実地調査によってはB類についても何がしかのラベルの存在が認められる可能性なしとしない。その点を含め、なお継続して資料の発見と考察に努めてゆかねばならない。本節の標題を「中間報告」とした所以である。

8. 「和書目録」の挿絵注記

本目録は書物一点ごとにその書名・著者・刊行年・刊行地・冊数・分量・内容・分類などの書誌を英文で記したものであるが、アストンは以上の外にもさまざまな情報を載せている。とりわけ、注目されるのはすでに第3節でも述べたが、挿絵の所在を一々注記していることである。ABあわせて2000点弱の書物のうち、35%近い670点ほどに「illustrated (挿絵つき)」などの文言が注記されている。

この挿絵注記について、かつて筆者は

「アストンのようなごく僅かな例外を除く多くの人々にとっては、直接視覚に訴える挿絵こそが日本の事物を知る唯一の手がかりであった。アストンの配慮が窺われる」

と述べ、後学に日本についての視覚情報の所在を示した点にアストンの配

慮があるとした。

しかし今は、そのような配慮はあったとしても、それだけでこれらの挿絵注記を説明することはできないと考えている。というのも、単に視覚情報の所在を示すだけなら「挿絵つき」とのみ記載すれば十分であるにもかかわらず、そして事実それが大半ではあるが、中にはそれにとどまらず、アストン自身の挿絵に対する評価をも記した記載が散見するからである。それらの、如上の配慮からはさして必要とも思われぬ挿絵評価は一体何を物語っているだろうか。

実例を挙げてみよう。便宜、まずは肯定的評価を記した注記から原文とともに掲記する。

A

28	墨竹発蒙	素晴らしい絵多数	(numerous good illustrations)
29	「芝居をテーマとした色刷版画集」	素晴らしい出来上がり	(good quality)
76	宇治拾遺物語	趣きのある挿絵つき	(quaint illustrations)
77	宇治拾遺物語	趣きのある挿絵つき	(quaint illustrations)
82	保元物語	趣きのある古い挿絵多数	(numerous quaint old illustrations)
110	若菜集	きれいな挿絵つき	(pretty illustrations)
121	相州亀谷一本槍	興味深い手法の挿絵つき	(curious style of illustrations)
183	(c) 江戸そが	興味深い挿絵つき	(curious illustrations)
	(d) けいせい山栞太夫	興味深い挿絵つき	(curious illustrations)
	(e) [一心女雷神]	とても興味深い挿絵つき	(very curious illustrations)
263	楽屋方言	趣きのある挿絵つき	(quaint illustrations)
365	勸進能番組	趣きのある挿絵つき	(quaint illustrations)
366	風流軍配団	興味深い挿絵つき	(curious illustrations)
390	福神教訓袋	挿絵はとても素晴らしい	(illustrations fairly good)

- | | | | |
|------|------------|---------------------------------|--|
| 483 | 羅生門 | きれいな挿絵つき | (prettily illustrated) |
| 518 | 狂歌奇人譚 | 素晴らしい挿絵つき | (nicely illustrated) |
| 532 | 万国新話 | とても興味深い挿絵 | (very curious illustrations) |
| 547 | 百家琦行伝 | 素晴らしい挿絵つき | (good illustrations) |
| 577 | しりうごと | 6枚の挿絵 (良) | (6 illustrations (good)) |
| 607 | 列仙全伝 | 大変興味深い素朴な挿絵つき | (very curious primitive illustrations) |
| 627 | あいきやう角田川 | 大変興味深い素朴な挿絵つき | (very curious primitive illustrations) |
| 647 | 伊勢参宮名所図会 | 巧みな挿絵つき | (well illustrated) |
| 687 | むさしあぶみ | 挿絵はとても趣きがあり、素朴 | (the illustrations are very quaint and primitive) |
| 751 | 曾我物語 | とても趣きのある素朴な画風の挿絵がふんだんにあり | (illustrated in a very quaint primitive style) |
| 793 | 歌仙金玉抄 | 挿絵つき かなり良い | (illustrated, rather good) |
| 796 | 武蔵野話 | [鈴木]南嶺による巧みな挿絵 | (good illustrations by Nanrei) |
| 813 | 独楽徒然集 年時なし | 美しい (あくまでも私見による限り。私は審査員ではない) 挿絵 | (beautiful (in my opinion, but I am no judge) illustrations) |
| 939 | 本化高祖記念録 | 挿絵良好 | (well printed and illustrated) |
| 1006 | 尾張名所図会 | 素晴らしい挿絵 | (good illustrations) |
| 1018 | 年中行事大成 | 見事な挿絵多し | (well and plentifully illustrated) |

B

- 87 紀伊国名所図会 **適切な挿絵つき 好印象**
(well illustrated, good impression)
- 151 辺要分界考 **興味深い水彩のスケッチもあり**
(some curious water-colour sketches)
- 244 釈迦八相物語 **素朴な挿絵あり** (primitive illustrations)
- 351 四国霊場記 **とても素朴な画風の挿絵つき**
(illustrated in a very primitive style)
- 433 根奈志具佐 **挿絵つき 滑稽な素描画集**
(illustrated, humorous sketches)
- 612 西国三十三所名所図会 松川半山と浦川公佐による**見事な挿絵つき**
(well illustrated by Matsukawa Hanzan and Urakawa Ko-za)
- 628 聖蹟図 **興味深い挿絵つき** (curious illustrations)
- 675 門田のさなへ **かなりいい挿絵** (rather good illustrations)
- 721 声曲類纂 **素晴らしい挿絵多数** (numerous good illustrations)
- 733 山海名産図会 **挿絵良好** (well printed and illustrated)
- 739 本朝女鑑 **素朴な挿絵** (rude illustrations)
- 764 古今武者物語 **挿絵つき 素朴なスタイル**
(illustrated in primitive style)
- 783a 近世奇跡考 **古い絵からとられた興味深い挿絵**
(interesting illustrations taken from old pictures)
- 834 中村座 **非常に素朴な手法の挿絵豊富**
(profusely illustrated in a very rude fashion)
- 871 通俗西遊記 **趣きのある挿絵が少し** (a few quaint illustrations)

全体に「趣きがある」(quaint)とか「興味深い」(curious, interesting)といった控え目な評語が多いことが知られる。また、それのみでは否定的評価とも受け取られかねない「素朴」(primitive, rude)という評語もまま見受けられる。

もっとも、A607,627,687,751でのこの種の語の使用法を見ると、アストン自身は「素朴」を肯定的な意味で用いていることは明らかであるが、それにしてもさほど積極的な評価とは言い難い。無論、「素晴らしい」(good, nice)とか「きれい」(pretty)といった評語やそれをさらに強調するような評語(fairly good, rather good)も見られるのであるが、これらにしてもやや抽象的で、今一つ積極性が感じられない。これは一つには大仰で過剰な表現を好まない英国人としての、あるいはアストン自身の性格によるものであろうが、それに加えてアストンが自身の専門とした日本の古典や神道ほどには日本美術について詳しくなかったことによるであろう。日本研究について多くの著作を手がけたアストンであったが、絵画など日本美術についての著作はない。

この点でも、アストンは学者らしい謙虚な姿勢を持っていたといえようが、そのことを端的に示しているのが、A813独楽徒然集(図版3・4)の評語である。

「美しい」とアストンにしては珍しく積極的な評語を記しつつも、「あくまでも私見による限り。私は審査員ではない」と個人的見解であることをわざわざ断っているところがそれである。「審査員ではない」とは「日本の絵画の専門家ではない」の謂であろう。

しかし、そのアストンも彼の目に拙劣と映った挿絵に対しては、敢えて否定的評語を書き付けている。以下に実例を列挙しよう(すべてA類。B類には見られない)。

A

101	当流小謡梁塵[集]	挿絵は多いが、さして見るべきものなし (numerous illustrations of no great merit)
163	[久徳画帖]	水彩画集。さしたる価値なし (not much value)
316	怪談牡丹灯籠	挿絵は下劣 (illustrated vilely)
318	鶴殺疾刃庖刀	挿絵つき (下劣) (illustrations (vile))
360	大岡政談	挿絵つき (拙劣) (illustrations (badly))
370	好色文伝授	挿絵つき 幻滅 (illustrated unedifying)

415 絵本忠臣蔵 挿絵つき (拙劣) (illustrations (badly))

686 皇朝後素集帖 色刷りを集めたもの。まあまあ良いといえるのは僅か。大方はつまらない。

(a collection of coloured prints, a few tolerably good, most are tedious)

先の肯定的評価に比べると、その数はごく僅かであるが、その評語は「下劣」(vile)、「拙劣」(badly)などと、かなり手厳しい。たとえば、318のつるころしねたばのほうちょう鶴殺疾刃庖刀の挿絵(図版5、ケンブリッジ本と同本の国立国会図書館蔵本)など、果たして「下劣」と評すべきほどの不快な絵かと疑わせるが、門外漢の筆者はそれ以上のコメントを慎むべきであろう。ただ、それらは少なくとも、アストンが当時の英国人・西洋人の一人として、日本のどのような絵に否定的評価を下したかを知る手掛かりを与えてくれる。その点ではまことに興味深い。

アストンは日本の絵の専門家であったわけではないが、江戸期の絵師について、少なくとも筆者などよりはるかに多くの知識を有していたことは確かである。それは上掲の肯定的評価の中に、挿絵の作者を明示しているものがあることによってわかる。

A796の鈴木南嶺、B612の松川半山・浦川公佐がそれであるが、ほかの挿絵注記にも以下のような名が見えている。

歌川豊国 (A160-162,187,188,983)、歌川豊広 (A168,235,1053)、葛飾北斎 (A169,1057)、月丘芳年 (A175)、松好斎半兵衛 (A196,198)、歌川国芳 (A215)、二代歌川豊国 (A215)、歌川国貞 (A215,959,1049,1050)、丹羽桃溪 (A281)、西田常清 (A287) 竹原春朝斎 (A338)、岩瀬京水 (A870)、西村中和 (A887)、三木光斎 (A944)、蹄斎北馬 (A946)、歌川国長 (A947)、松川半山 (A979)、四方義休 (A979)、岡田玉山 (A981)、橋本玉蘭斎 (A982)、田崎艸雲 (A983)、鈴木芙蓉 (A1007)、林子平 (B114)

豊国、豊広、北斎といった江戸期の人気浮世絵師はもちろんのこと、外にもアストンが記すに足ると判断した絵師の数はかなりの数に上る。アストン自身が江戸期の絵師について、並々ならぬ知識を持っていたことを窺わせる。

ただし、その知識の源泉は英国の外科医ウィリアム・アンダーソン (William Anderson 1842-1900) であった。

A157を例にとろう。これは古今狂歌袋について採録しているが、その絵の作者を「北尾政演」と記したアストンはさらに、これが「著名な小説家京伝の画家としての名 (the artistic name of the famous novelist Kioden)」であると注記している。そして、彼はさらに「B.M.のアンダーソン絵画目録344頁を見よ (see Anderson's Catalogue of pictures in B.M.)」と記しているのだが、このB.M. (British Museum大英博物館) の「アンダーソン絵画目録」とは、アンダーソンが1886年に刊行したDescriptive and Historical Catalogue of a Collection of Japanese and Chinese Paintings in The British Museumのことで、アンダーソンはわが国の海軍軍医学校に1873年から1880年までの間お雇い外国人教師として勤務する傍ら日本の絵画を多数収集して帰国、その後大英博物館に買い取られたコレクションを彼自身が目録化したのである。

今アストンに従って、その600頁にも及ぶ大部の絵画目録344頁を参照してみると、北尾政演 (KITA-WO MASA-NOBU) について「The artistic name of the famous novelist KIO-YA DEN-ZO(KIO-DEN)」と述べられており、アストンがこの説明文を自身の目録に転載したことが一目瞭然である。

アストンはこの外にも上記の「アンダーソン絵画目録〇頁を見よ」の注記を多数目録に施しており、アンダーソンの日本美術についての学識に対して揺るぎない信頼を置いていたことが窺われるが、彼がアンダーソンの学識を頼みとしたのは無論この絵画目録だけではなく、また絵師の情報に限ったことでもなかった。

伊勢物語を採録したA99を見てみよう。これには「S」字の書き込みもなく、しかもアストン・コレクション中の現物にもアストンの蔵書印が捺されているから、紛れもなくアストン自身の蔵書であるが、これについて彼は以下のような注記を施している。

「この知られる限り最古の版本には適宜挿絵がついており、またこの本は着色紙に印刷されているが、現在ではかなり褪せている。W.アンダーソン氏

によれば、この本は恐らくは挿絵つきの版本としては日本最古の本であろう。それ故、この本は収集家の注目を引いている。」

このアンダーソンの見解と情報は上記の絵画目録には見当たらない。あるいは、何らかの論文等に発表されたものかも知れないが、私はこの本がアストン自身の蔵本であることから、アストンが日本または英国でこの本を直接アンダーソンに見せて、聞き出したものではないかと推測している。アストンは日本滞在中の明治10年（1877）にはアンダーソンの診療も受けており（楠家重敏『W.G.アストン』240頁、雄松堂出版、2005年）、交流があった。

さて、以上述べてきたように、アストンは日本美術に関してはアンダーソンに全幅の信頼を寄せ、自らは専門家ではないという立場を自覚していた。それでもなお、蔵書の挿絵について肯定的または否定的な評語を取って注記し、時に絵師の名を明記し、アンダーソンの絵画目録を参照し、さらにはアンダーソンに直接尋ねたこともあったとすれば、それはアストンが日本美術とりわけ絵画に対しても並々ならぬ関心と探究心を持っていたからである。和書目録の挿絵注記はそのことを余すところなく伝えている。『日本文学史』を著したアストンは数多の古典や小説を読破したが、それはやはり数多の挿絵にも接したことを意味する。日本の絵画に関心と探究心を持つに至ったであろうことは、その一事をもってしても、蓋し当然なのである。

最後に、本節でふれた独楽徒然集について附言しておきたい。本書は津軽五代藩主信寿によって享保16年（1731）に版刻された絵入り乾坤二冊の詩歌・俳句本であり、その挿絵には小川破笠・英一蜂とその一門が当たっている。版本と版本はかつて河津ミドリ氏の所蔵であったが、現在は弘前市在住の別の個人の所蔵に帰している。河津氏の所蔵となっていた時期に十年間にわたって版本を借用・展示してきた弘前市立博物館は、昭和62年（1987）に至り、これを復刻・刊行した。以上の記述はこの復刻本のあとがきと筆者が弘前市立博物館から直接得た教示に拠っている。

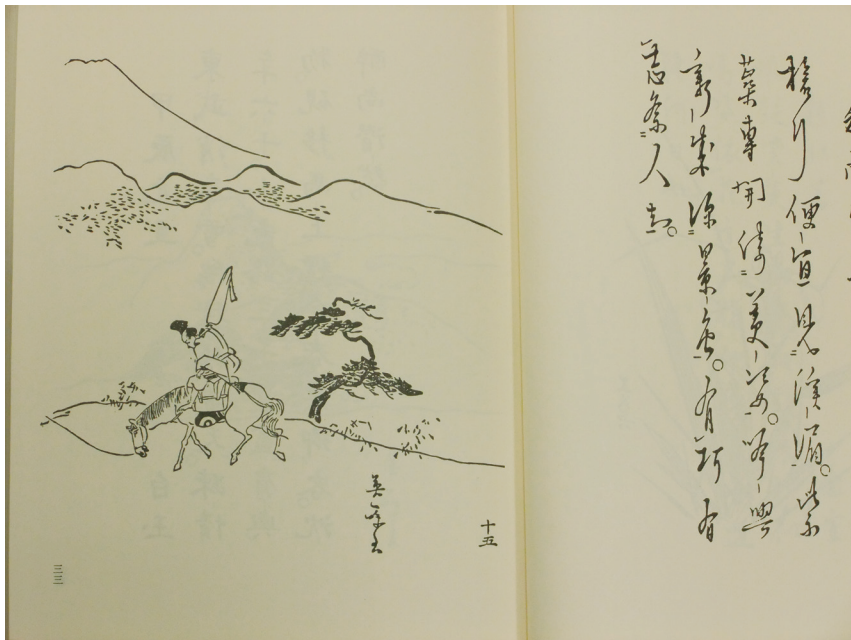
ところで、その復刻本のあとがきでは、版本は河津氏蔵（当時）の乾坤合本一冊しか確認されていないとされているが、実はCULのアストン・コレクションにもアーネスト・サトウの蔵書印を有する同じ形態の合本一冊が存在する（ピーター・コニッキー、林望共編『ケンブリッジ大学図書館所蔵和漢古書総合目録』（1990年）993番）。アストンの和書目録A813は、いうまでもなくこの本を採録したものであり、そこには確かにサトウ蔵書を示す「S」字も記入されている。時期は不明だが、サトウが日本で入手し、恐らく他の膨大な和書とともに1892年にアストンに貸与され、アストンの死後、1912年にやはり他書とともにケンブリッジ大学図書館に売却されて当図書館の所蔵に帰したのである。かくして、独楽徒然集の版本は、今のところ、日英両国に各々一冊ずつ現存していることになる。

筆者は平成21年（2009）夏、ケンブリッジ大学図書館蔵本を実見し、複写を依頼して帰国したが、その後で先の復刻本のことを知るに至った。後日送られてきた複写があいにく鮮明度に欠ける憾みがあったことから、小稿では弘前市立博物館から転載許可を得て、敢えてより鮮明な復刻本の写真を図版3・4として掲載することとした。前者は英一蜂、後者は小川栄羽の手になるものである。

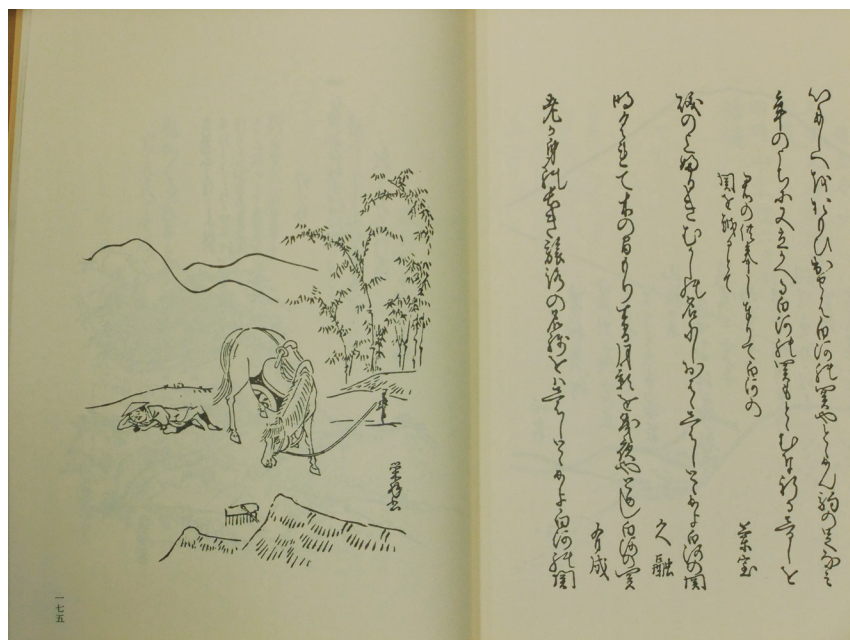
独楽徒然集は合せて141図の挿絵を有する。ここでは紙幅の関係から、そのうちの2図のみを掲げるに留めたが、これらを含めた全体の印象について門外漢を承知で言えば、いずれも枯淡にして飄逸、いかにも英国人好みのそこはかとないうモア、仄かな滑稽味とでもいおうか（その滑稽味は彼がやはり「素晴らしい」と評したA547百家琦行伝の挿絵とも共通する）。アストンはそれらの絵を、「あくまでも私見による限り」と慎重に断りつつ、彼にしては最大級ともいうべき「美しい (beautiful)」という評語で称賛したのだった。

本稿は平成22年度科学研究費補助金基盤研究（C）「幕末・明治期の先駆的英国人日本学者による国学の受容と評価」（研究代表者：梶尾達哉）および平成20・21・22年度科学研究費補助金基盤研究（B）「YAMATO-Eからみる日・英・米の日本美術史観に関する比較研究」

(研究代表者：下原美保) による研究成果の一部である。調査・研究・成稿にあたって、種々便宜を与えて下さったケンブリッジ大学図書館、弘前市立博物館、国立国会図書館に対し厚く感謝申し上げる。



図版3 獨樂徒然集・英一蜂画（弘前市立博物館復刻本より）



図版 4 獨樂徒然集・小川栄羽画 (同上)



図版5 鶴殺疾刃庖刀 (国立国会図書館蔵本より)

